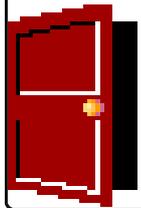


《読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



読書活動への扉を開く！

桑村小学校 令和4年5月30日 文責 渡邊

今回から参考図書を替えました。印南敦史(いんなみあつし)著『読書する家族のつくりかた』(星海社2021年8月)を参考に、家族で「読書活動」に取り組む方策を考えてみたいと思います。

文献の帯には、次のように記されていました。

「読書をゲーム化して、家族みんなで楽しんじゃおう！

「子供が本を読まない」、「自分も昔みたいに本が読めなくなった」とお悩みの方にご提案です。読書をゲーム化して、家族みんなで楽しんでみませんか？楽しいことがたくさんある現代、読書時間が減るのはむしろ当然。ですから、まずは「なぜ読めないのか」を、遊び感覚で共有しましょう。「読書の悪口」ゲームで読書への苦手意識をリフレッシュし、いろいろな読書の楽しみ方をゲーム感覚で試してみるのです。そうすれば、自然と読書が楽しくなってくるかも。もちろん新しくゲームをつくるのもOK。読書をゲーム化すれば、新たな家族とのコミュニケーションが生まれるはずです。」

そもそもなぜ、読書をするのが難しいのでしょうか？

このことについて、筆者は次のように述べています。

読書習慣はなぜ身につかないのかー子供は本当に本が苦手

「ゲームをしたり、YouTube動画をダラダラ見続けたりするのは時間の無駄。それよりも同じ時間を読書に費やした方が有意義」

大人は、そう考えたくなるかもしれないし、それは理にかなった話でもありません。しかし、物事はそう簡単に理屈だけで片付けられないものでもあります。

仮に「1位が読書で、2位がゲームで、3位がYouTube動画で…」というように順番を決めたとしても、そこにあまり意味があるとは思えません。順番を決めれば問題が解決するというものでもありませんし、第一大人から「1位は読書」と決めつけられたとしたら、子供は当然のことながら反発することになるでしょう。その子にとっての優先順位は、その子自身が決めるべきものだからです。大人はよかれと思って自分の尺度で押しつけてしまいがちです。しかし、本当の判断基準は本人のなかにあるべきなのです。(中略)

たとえば親がずっとゲームの画面から目を離さないような環境にいるのだとすれば子供の関心の大半もゲームに向けられることになるでしょう。YouTubeばかり観ている親が近くにいれば、「自分もYouTubeをもっと観たい」と子供が感じて当然です。

では、親がいつも本を読んでいるような環境だったとしたら？いうまでもありませんが、その場合はその子の中で本のバリューが自然と大きくなっていくと思います。僕自身がそういう環境に育ったので、そのことははっきりと断言できます。親がいつも本を読んでいたたり、その内容を話題にしたり、家に本がたくさんあったりすると、無理なく本や読書に対する関心は高まっていくのです。(p33. 34)

(下線は、私が引いたものです。)

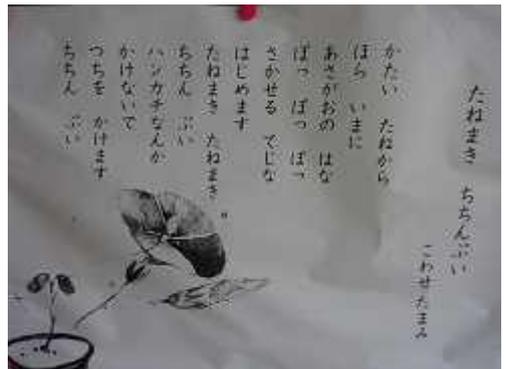
子供の意思を尊重する姿勢は、とても大切なことであると思います。優先順位を決めるのは本人であることが重要なこととなります。親の言うとおりに生活することから、自分で考え判断し、行動するようになるのです。

他者から「～しなさい」、「～したらどう」と言われ、その通りに行動することは、自分で考えるという大切なところが抜けてしまうことが危惧されます。

学校生活の中でも、同じような場面はないでしょうか？

1年生の生活科で「アサガオを育てよう」という学習があります。本校の1年生もアサガオの種を蒔き、そこからかわいい芽が顔を出しています。子供たちは、大切にアサガオを育てようと水やりを行っています。

以前、勤めていた小学校1年生Aさんの話を紹介します。



【あさがおの「詩」】

6月のある雨の日、Aさんは傘をさしながらアサガオに水やりを行っていました。

私はAさんに尋ねました。

「今日は雨が降っているね。Aさん水やりたいへんですね。雨がふっているけれど、どうして水やりをしているのですか？」

Aさんは、次のように答えました。

「校長先生、朝ご飯食べてきた。」

「うん、食べたよ」

「アサガオもご飯食べたいんだよ。晴れの日も雨の日もご飯食べるでしょ。アサガオも同じだよ。私はおうちの人のご飯を作ってくれるけど、アサガオに水をあげるのはわたしの仕事なんだよ」

Aさんに理由を聞いてよかったなと思いました。雨の日は水やりをやらないで終えてはいけないのです。

なんてすてきな思いをもっているのでしょうか。自分の家族に大切に育ててもらっているという経験から、アサガオを大事に世話をしたいという思いをもったのですね。

読書活動についても、「読書を楽しみたい」という思いを子供自身が抱くことが大切だと思います。

----- 切り取り線 -----

「読書活動の扉を開く」(5月30日号)を読んだ感想

()年()